

程度の變化を認めるが、中毒症移行例にはすべて明かな變化がみられ、血管型よりみると攣縮型が最も多く、また中毒症移行例の67%が高血圧家系あるいはその近親に中毒症をみた家系に属していた。③皮膚毛細血管抵抗値は中毒症では低下し、血管透過性の亢進がみとめられた。④ Insulin による發汗、血糖、好酸球試験では妊娠すると間脳一下垂體—副腎皮質機能が漸次亢進し、中毒症では更に異常亢進を示すものが多いことが判つた。

Ⅲ. 妊娠中毒症の治療

降壓劑としては Apresoline, Serpasil の併用が最も適當であり、浮腫には Diamox が著効を奏した。

6. 妊娠動物における Reilly 現象の成立について

(東京醫大) 秦清三郎, *高橋禎昌, 藤田眞助, 野平知雄, 齋藤成一, 高見嘉都司, 豊田輝人, 前島昭二, 桶谷正一, 柵山勝利, 林 達朗, 池田純輔, 陳 育俊, 石居秀朗, 長谷川行信, 喜納 進

Reilly 現象すなわち自律神経の過剰反応にもとづく症候群による病因論の新概念は、近來 Laborit らがその理論を應用して臨牀的成功を収めたことから注目されている。

われわれは Reilly の實驗方法に考按を加えて妊娠動物に適用することにより、從來妊娠中毒症なるカテゴリーに一括されて來た妊娠、分娩に伴う種々なる母體障礙に類似する症候を發現させることが出来るかどうかを検討した。

I. 實驗方法

1) 實驗動物：妊娠白鼠によつて豫備實驗を行い、妊犬、妊兎によつて確認する。

2) 侵襲方法：ゴナドトロピン、性ホルモン、副腎皮質ホルモン、自律神経毒、アルコール、ペプトン水、鹽化アンモンなどの化學物質、感應電流刺戟、大腸毒などの細菌

3) 侵襲部位：下腹神経、勃起神経、骨盤神経叢、内臓神経節、子宮靜脈囊法（頸靜脈囊法の應用）。

4) 化學物質の濃度：Reilly 現象の本旨に基き、その藥物の通常生體効果量以下の各種濃度を使用することを原則とした。

5) 發現阻止手段：クロールプロマジン投與、下垂體剔除、副腎剔除。

6) 判定方法：胎盤、子宮、肝、腎、肺、胃、副腎、

腦などの臓器の形態學的病變、血壓、尿の變化。

Ⅱ. 成績

各種化合物の種々なる濃度と侵襲部位との組合せは多岐にわたるので、例数は乏しい憾は免れないが、興味あると思われる結果の概要を摘記する。

1) 侵襲によつて病變をおこす場合は、出血、壊死などによつて代表される血管障礙の同一形式非特異性病變が浮び上つて觀察される。

2) 病變がおこる場合、クロールプロマジンの阻止効果は適確でないが、副腎剔除は殆んど阻止し、下垂體剔除はこれにつぐ。

3) 今のところ、侵襲部位と侵襲方法には特異的な組合せは見つからず、また骨盤神経叢、内臓神経節及び子宮靜脈囊法の一部にのみ病變が見られる。

4) エストロゲン、20%アルコール、5%ペプトン水の内臓神経浸潤注射の場合は、肝、腎、胎盤に上記病變が認められる。

5) 大腸菌浮遊液の骨盤神経叢浸潤注射は胎盤病變を確實におこす。

6) DOCA及びアドレナリンは子宮靜脈囊法によつてのみ胎盤及び腎に病變をおこす。

7) 病變のある場合、血壓ははじめ上昇し、まもなく低下するものが多い。尿は不定。

8) これ以外の侵襲方法は豫備實驗の段階で不変または不定で、さらに精査を要するものである。

以上の成績からつぎの如く判断する。妊娠動物の腹部の自律神経部位に各種の侵襲原因を加えるとき、一部の侵襲は Reilly 現象を成立させることが確實であり、その際の病變は血管變化による退行性病像という基本的な點において、ヒトの子癩の病理學的所見に甚だ近似する。

7. 妊娠家兎における Reilly 氏現象の研究

(慶大) 野嶽幸雄, *櫻井祐二, 田村昭蔵, 土屋恭一

妊娠中毒症の本態的研究に關しては、本邦においては、胎盤物質の研究が多く、また歐米においては、體液動體の研究が盛である。

われわれは Reilly 氏現象の概念を導入し、本現象の妊娠中毒症における意義につき検討を進めている。まず妊娠家兎の子宮、胎盤における Reilly 現象の發現に重點をおき、つぎの實驗を行つた。

實驗方法。妊娠家兎の兩側または偏側の内臓神経節及びその周圍に Stressor の微量 (P. S. 物質 1~3 mg,

血清その他 0.1cc ~ 0.4cc) をただ1回注射し、24時間後剖検し、子宮胎盤を始め、各種臓器の變化を肉眼的組織學的に窺つた。

Stressor としてつぎのものを使用した。

①真柄教授分與による P.S. 物質 (胎盤絨毛物質)、②重症妊娠中毒症患者血清、③正常妊娠血清、④非妊健康婦人血清、⑤腦下垂體後葉ホルモン、⑥化學物質—1% 醋酸鉛、20% アルコール。

實驗成績。上記 Stressor 中、①②處置群においては、胎兒死亡・流産・子宮胎盤の溢血・胎盤後面の出血・凝血附着・羊水内出血が著明に見られ、組織學的には、絨毛・脱落膜の強度の血管充盈・出血・血腫形成・廣範なる壊死・子宮筋層内の出血・血栓が認められる。③④では變化が軽度である。⑤においては出血性變化はなく、胎盤面はかえつて貧血性で胎兒は殆んど死亡し、羊水は濁濁していた。⑥においても①②と同様出血性變化は強度であるが、壊死像は部分的である。

阻止實驗。クロールプロマジン單獨及びクロールプロマジン、プロメタジン併用の筋注を行い、Stressor を前實驗と全く同様の條件のもとに使用し、同じく24時間後に剖検したところ、流産・死亡は全例になく、羊水は全く透明で胎兒は生存し、肉眼的にも組織學的にも出血性變化は殆んど認められず、前記處置群のごとき變化は全例に防喝しえた。また處置群の各臓器の變化についても發表する。なお第3腦室に Stressor を注入し、痙攣・昏睡・子宮胎盤の出血性變化などもえた。

8. 妊娠中毒症に関する研究

(東北大) *九嶋勝司, 鈴木雅洲, 安達寿夫, 本橋研一, 門脇 正, 岩淵慎助, 野田起一郎, 吉崎 宏, 阿部 務, 神尾憲治, 早乙女二郎, 川原 浩, 橋本亮三, 山崎金吾, 森 滋, 金井忠雄

1) 新鮮胎盤より各種高級成分を抽出し、その中毒症様症狀惹起作用を檢索してきたが、今回、硫酸⁴/₁₀飽和沈澱性蛋白質(V)、硫酸⁵/₁₀飽和沈澱性蛋白質(VI)、pH 6.0析出性蛋白質(VII)、イチン硫酸(VIII)、ペントース核酸(IX)の5物質を妊兎に靜注し、その肝・腎・心・副腎の組織學的變化を研究した。肝の變化は輕微で殆んど所見がないが、V群において約半数に小葉中心部出血性壊死層と周邊部貧血性凝固壊死巢を認めた。腎ではV群及びIX群に glomerulonephrose 様所見をえ、心の筋線維腫脹・退行變性・間質の浮腫性膨化などはV、VII、

VII群に認められた。副腎の束状層の萎縮、網状層の肥大と退行變化、網状層脂質の斑狀消失などの諸變化はIX群に最も強かつた。

つぎに胎盤より低分子の蛋白質を抽出して電氣泳動的に均一なものとし、妊娠白鼠に靜注するに、腎の組織學的變化・尿量減少・蛋白尿増加・カタラーゼの減少を認めた。

2) 健康非妊婦・健康妊婦・中毒症妊婦の血清のアルコール抽出低分子物質の血管收縮作用を、家兎耳殻灌流法により檢した。該作用は健康者よりえたものに殆んどなく、妊娠中毒症患者の大多數、殊に高血壓を有する患者の殆んど全例に認められた。

3) Gemzell 法により抽出し Sayers 法により定量せる血中ACTHは、非妊婦で殆んど認められず、正常妊娠時やや増加し分娩時最高で産褥期に消失するが、中毒症患者では明らかに増量する例が多かつた。尿中總17-KS 値及び總17-OH corticoid 値は、妊娠分娩産褥の各期を通じて中毒症患者に低く、症狀の増悪に従つて低下する傾向にあつた。androsteron と etiocholanolone は非妊婦より妊婦に低く、正常妊娠時より中毒症時に低いのに反し、11-oxygenated, 17-KS は正常妊婦に比し中毒症患者に高い比率を示した。従つて中毒症時、ACTHと17-KS または17-OH corticoid 間に相關關係を認め難い。

4) 健康妊婦並びに中毒症妊婦の尿中 Gonadotropin を比較するに、この値は中毒症時高く症狀の増悪に従つて増加の傾向にあつた。gonadotropin の値は中毒症患者においても産褥早期に急減した。estrone, estradiol, estriol, pregnanediol はすべて正常妊産婦に比し中毒症時低かつた。中毒症患者では、一種の steroid hormone 値が低いときは他の steroid hormone の値も低下することが多く、これに反し上位 hormone である gonadotropin は増加の傾向を示し、この兩群の hormone 間に必ずしも並行關係を認め難かつた。また上記の各種 hormone の測定値は、必ずしも臨牀症狀と平行しなかつた。

5) Birnie 法變法により測定せるADS値は、健康妊婦より中毒症患者、殊に浮腫の著明な患者に高値を示した。尿中 Na は健康妊婦より中毒症妊婦に低濃度であり、殊に重症中毒症時に低かつた。妊婦に NaCl 溶液を負荷するに、單位時間における Na 排泄量は健康妊婦に比し中毒症患者に悪く、殊に重症患者に悪い結果をえた。尿中 Na 貯溜 steroid を Luetscher らの